

水のふるさと活性化へ

「あさくら3ダム」を観光資源に

福岡県の朝倉地域に九州最大の堤高を誇る小石原川ダムが完成した。先行する寺内ダム、江川ダムと合わせた「あさくら3ダム」の総貯水容量は8000万立方メートルを超える。事業主体の水資源機構（金尾健司理事長）は、日本有数の水のふるさとを活性化させようと、朝倉市、東峰村と共に3ダムを観光資源と捉えて活用する方策の議論を重ね、関連団体や企業も巻き込んだ取り組みを展開する。

水資源機構

地域の復興に結びつく各種活動の実施に向けたコーディネート、各団体の連携、地域の新しい魅力の発掘などに取り組んでいる。別途朝倉市では、3ダムイベント実行委員会を立ち上げ、3ダムを観光資源とする中で周辺地域を含めた観光振興に役立つ活動にも取り組み始めた。

（ついでに）19年6月に実施した観光飛行主催のツアー「朝倉・みず物語」では、

小石原川ダムは、河川環境保全や異常洪水に備える「緊急水の確保」、福岡県南地域の「水道用水の確保」、小石原川沿川の洪水被害を軽減する「洪水調節」を目的としたダムとして計画され、予備調査開始から40年以上の歳月を費やして完成した。

■ □ ■

3月28日に現地で開かれた完成式典で金尾理事長は、三つのダムを地域資源とする「観光振興にもより一層貢献できるものと考えている」と強調。建設から管理へと移行するダムの運用を通じた多目的ダムに期待される本来機能に加え、地域振興にも生かしていく意向を示した。

朝倉地域は2017年、「平成29年7月九州北部豪雨」での記録的な降雨によって大きな被害に見舞われた。間もなく4年が経過する現在も被災地域の復興・復興対策が進行中だ。

水資源機構では小石原川ダムの建設工事を進める一方、この豪雨から1年を経た段階で「3つの湖による復興戦略会議」を朝倉市、東峰村と共に発足。3ダムを活用した地域の活性化が被災地域の復興にもつながるものとして、互いに

これまで「復興戦略2018」「同2020」を策定し、ダムツアーやダムを楽しくイベントの実現に向けて、旅行会社や周辺地域に進出する大手企業なども巻き込んだ取り組みを展開している。特にダムツアーでは、18年11月に旅行会社や関連雑誌関係者などが参加した「あさくら3ダムを巡るダムツアー」一般の人たちが参加した「小石原川ダムキラキラナイト☆バスツアー」を実施。これら成果も生かしながら朝倉市、東峰村の観光地を組み込み「3ダムと朝倉の古代歴史を巡る」といった複数のツアー企画案と「3ダムの朝倉自然体験」を提示する資料を作成。旅行会社に売り込んだ。

両首長が参加する復興戦略会議で決めた取り組みをどう進めていくか、各団体による活動状況やイベント計画を確認する目的で復興戦略推進チームも発足。19年3月から会議を重ねてきており、地



小石原川ダム完成を機に 前向きな提案で地域貢献

■■■ 地域の期待 ■■■

【林裕二朝倉市長】



小石原川ダムの完成を心よりお喜び申し上げます。昨年7月には、大雨により小石原川ダムの計画を上回る洪水が発生しましたが、試験湛水中でしたのでダム下流は心配せずに済みまし。小石原川ダムが、地域の安全な暮らしと安定した水利用に貢献してくれることを期待します。

三つのダム、ダムの水が合流する筑後川そして筑後川にあり故中村哲医師とゆかりの深い山田堰とを結び、水を学ぶ大きな回廊を新たな地域資源にしていきたいと考えています。

【渋谷博昭東峰村長】



小石原川ダムの完成に際して、心よりお祝い申し上げます。近年の地球温暖化に伴う気候変動による水災害の激甚化や異常洪水が懸念されるなか、小石原川ダムの役割は非常に重要であるものと考えています。

昨年からのコロナ禍の影響に伴い、自然豊かな地方への関心が高まるなか、ダム湖周辺の素晴らしい自然や地域の魅力を活用し、地域活性化につなげることで「平成29年7月九州北部豪雨」からの復興のシンボルとなることを期待しております。

建設が進む小石原川ダムを夜間に見学（小石原川ダムキラキラナイト☆バスツアー）18年11月



ダムの裏側を見る興味深いツアー（ウイングフェスティバル2018年12月）

ダムを知らない参加者からも多数の質問が出るなど好評を博した。同11月の筑後川フェスティバルに東峰村の一端で行われた小石原川、寺内川、江川カレイドロに加え、地域の有志が趣向を凝らした料理や各種グッズの製作・販売などを見学するなどダムの裏側を知る貴重な機会に参加者に提供した。

地域資源との連携も重要な要素となる。朝倉市では、全ダムの地域で展開される「ダムカレイドロ」に加え、地域に協力する店舗を増やしながら「ダムでつながる街を」や各種グッズの製作・販売など、どの情報も取り上げる「朝倉市3ダムカレイドロ&ASAKURA 3DAM 周遊マップ」を作成。地域での活動を展開するグループのメンバーは、ダムとグッズのコラボレーションに協力する店舗を増やしながら「ダムでつながる街を」や各種グッズの製作・販売などを見学するなどダムの裏側を知る貴重な機会に参加者に提供した。

スポーツと連携した活動も模索されており、自転車も走るサイクリングイベントも昨年3月に企画されたが、新型コロナウイルスの影響で開催は中止。ポストコロナも見据えた今後の企画へも期待が高まるという。

■ □ ■

水資源機構では「3ダムの適切かつ確実な管理という水機構の使命を果たすことで地域に貢献していく」（杉尾治英後川上流総合管理所長）とする。その中でも地域振興、さらには朝倉・東峰地域の復興に向けた自治体や地域からの期待も肌で感じている。地域振興に3ダムを活用するには各種契約もある。それでも「制約があるからできない」ではなく、「どうすればできる」「このような形であればできる」といった前向きな考え方で取り組みたい」（同）とし、地域の提案を受け取るだけでなく、水資源機構自らもさまざまな提案を行うなど地域の持続的な活性化につながる活動に意欲を示す。

出典：日刊建設工業新聞12面
掲載日：2021年5月25日
その他：本記事の掲載については、日刊建設工業新聞社様より記事転載の許諾をいただいた上で掲載しております。